

B・F・ホゼリッツ著

『経済成長の社会学的側面』

Bert F. Hoselitz. *Sociological Aspects of Economic Growth*. Glencoe, Illinois: The Free Press, 1960. Pp. 250.

この本は著者ホゼリッツが1952年から57年までの間、各国の雑誌に発表した低開発国の経済発展の問題に関係する9篇の論文をまとめた論文集である。これらの論文がはじめて発表された雑誌のいくつかは、日本で生活するわれわれには通常入手しがたいものであるから、本書が刊行されたということは、われわれに大きな便宜を与えてくれる。

読者がはじめてこの論文集を読んだとき著者に対していただく感想は、あるいはこの著者が多分に分類癖の濃厚な、そうして他人の説の受け売りの上手な学者であるという若干否定的な印象であるかもしれない。

第1の分類癖は、たとえば後述する「経済成長の類型」や、著者が Talcott Parsons を引用した“Pattern variables”にも現われているが、これは著者の経済発展理論に対する接近の仕方を見るうえで重要である。

低開発国の経済発展の問題は、もともと2つの矛盾に直面しているように思われる。その1つは問題を理論的に一般化しようとすればするほどその議論は政策的に無内容なものとなってしまう、逆に政策的提案に対して有用であろうと努めるときは、あまりに多くの特殊事情を考慮しなくてはならないため、その分析はハーシュマンがいう「終結することのない政策のリスト」とならざるをえないということである。

発展理論がもつもう1つの矛盾は、分析が operational であることを期待して定量的な分析用具——ホゼリッツはこれを“purely economic terms”で代表させる——にたよるときは、発展において最も重要な時期——ホゼリッツはこれを“the period of rapid economic advance”とよぶ——が内包する社会的・制度的な変化の要因をとり入れることができないことにある。

歴史のなかに反覆する要素と反覆しない要素とがあるとするれば、ホゼリッツはその「反覆する要素」を重視する。なぜならそうすることなしに理論は成立しえないからである。しかしこのように個別の事象と一般的・法則的な要素、また純経済的用語で説明すべき要因と社会的・制度的な要因とが混在、対立する場において問題を

処理しなければならないときどういう方法が妥当であろうか。それはホゼリッツの考えに従えば、歴史的・理論的そして純経済的であると同時に、経済外的要因をも考慮に入れて構成されたいくつかの発展の類型を組み立てる以外に接近の方法がないのである。かれはみずからの立場をドイツ歴史学派、特に後期のそれに擬しているが、第2章ではつぎのようにもいっている。「それ自体人文的(cultural)変化に関係ある理論の領域における著しい不確定性を前提とすれば、経済発展および人文的变化の一般理論を定立しようと努めることは時期尚早であり、現在入手しうる科学的素材からすれば(こうした試みは)非経済的ですからあるであろう。われわれは異なる社会のタイプと、『伝統的』な経済組織から『近代的』なそれへの異なるタイプによる変化と移動との理論モデルを進展させることから始めた方がよいであろう。」

第2に他人の説の受け売りについていえば、一般に近年、経済理論で真に著者の独創と思われる要素がどれほどあるかは疑問であるし、また別して経済発展の理論においては、そもそもそうした奇抜な仮説が要求されるものかどうかということが問われなくてはならないであろう。必要なのはむしろ総合であり、実践と科学的探究によってえられた成果を特殊な問題に応じて効果的に利用するということである。われわれは理論に対して性急であるよりは、現実に対して忍耐強くあらねばならないのである。そのように考えれば、ホゼリッツがこの論文集で示した思考の発展方式、発展理論における社会的要因の導入の方法などは確かに1つの総合の名に値するもののように思われる。

第4章の「経済発展の諸類型」は、かれとしてやや独創的であり、かつこの論文集の最も重要な1章であるように思われる。かれはここで、経済発展の型を3組の2分法によって示している。第1の分類は経済発展の途上で国民経済が支配しうる天然資源の量と、これに対応する人口との比率であり、やや狭い意味では通常 man-land-ratio と呼ばれる。この分類により、資源が豊富でつきつぎとフロンティアを求めてゆく経済発展の型は拡張型(expansionist)とよばれ、逆に内部を開拓してゆかなくてはならぬ型は内政型(intrinsic)と呼ばれる(評者はこれらの訳語については全く自信がない)。

第2の分類は経済発展の途上で外資に依存したり、輸出入貿易の急速な拡張によって資本財を輸入したりしなくてはならぬ型とそうでない型との区分であり、外国に依存しない型を自給型(dominant)、依存する型を衛星型

(satellitic) という。著者によれば衛星的なタイプは国際分業の原理に通ずるものであるが、多くの国は歴史上経済発展の初めの段階は衛星的で、その後しだいに自給的な型に移行するという。

第3の分類は経済発展過程における政府の干渉の度合いに依存し、干渉の弱いものを自生的(autonomous)、干渉の色彩の濃いものを誘導的(induced)という。

以上3組の2分法を結合すると、たとえば拡張型-自給型-自給型というような組が合計8個できる。ホゼリッツはそのおのおのの角砂糖に相当する経済成長の実例をあげているがそれを表示すると第1表のようになる。

第1表 経済成長の型

	自給型	衛星型	
拡張型	米 国 (1830-1890年)	オーストラリア (1914年以前) カナダ (1910年以前)	自生型
	ソ 連 邦 (1929年-現在)	日本支配下の満州 ベルギー領コンゴ ポルトガル領アフリカ	誘導型
内攻型	19世紀フランス およびドイツ	デンマーク スイス (1914年 以前)	自生型
	日 本 トルコ (1922年 以降)	東部ヨーロッパ の人民民主主義 諸国	誘導型

上記の分類にはさらに若干の注釈を必要とする。ホゼリッツは経済の急速な成長をもたらす人的要因としてシェンペーターの“innovating entrepreneur”, “deviant”さらにパークの“marginal individual”をあげているが、第3章ではこうした人的要因のみでは現在の低開発国の発展にとくに必要な工業資本主義(industrial capitalism)のぼつ興のメカニズムを説明することはできず、これを補うものとして天然資源と人口の比率、および政府の政策が考慮されるとしている。後者の2点が発展したものがexpansionist対intrinsicおよびautonomous対inducedの2分法である。したがって第3章のコンテクストから見れば、いかにも expansionist がかつ autonomous であることが経済発展にとって有利であるという結論になりかねないが、しかし第4章ではこれらの2分法は経済発展上有利、不利の区別なく対置されている。ここに若干読者の理解を妨げる難点があるように思われる。

これに反して Talcott Parsons の“pattern variables”を引用したところでは、経済発展に対して有利な型がいくつか明瞭となっている。すなわちここでは achievement, universalism および specificity である方が、

ascription, particularism および diffuseness に比して経済成長にとっては決定的に有利なのである。

著者があげた2種類の box, すなわち“pattern variables”の box と“patterns of growth”の box との関係をもう少し詳しく調べる必要があるであろう。ホゼリッツは、経済社会の近代化には particularism から universalism への変化、すなわち伝統的身分関係の変化が往々伴うことを述べているが、他方伝統的身分関係が温存された例外として、ニューギニアの Maori 族、および日本の例をあげている。かれによれば、日本の近代化のいない手は上層から下層への権力の移転はあったとしても、一貫して武士階級であったのである。それならば日本の近代化を積極的に推進した要因は新興階級のぼつ興ではなく、どこかほかにも求められなくてはならない。確かに日本には明治以来 achievement の pattern の著しい成長があった。また specificity も浸透した。しかし他方“patterns of growth”の側からみれば、日本がintrinsicであったこと、dominant であったことは積極的な成長要因とはみとめられない。また日本が induced であったことは成長にとってマイナス要因であったのか、あるいは他に特別に有効な inducement が作用したのかのどちらかでなくてはならない。おそらくその後者であろう。そうだとすれば“patterns of growth”によって説明されることは問題のほんの始まりにすぎずこの box は今後成長のメカニズム解明によって、いっそう内容が豊かにされなくてはならないであろう。

この場合ロストウが近著 *Stages of Economic Growth* で強調した政治的要因が想起される。ロストウにおいては“preconditions”の時代に伝統的支配階級が無力化すること、一層遠い horizon をもった新興階級がぼつ興すること、外国の侵害に対して国内が対外的に結束することおよび国内諸階級の coalition など各種の政治的摩擦要因が強調されているのである。ここに多少蔽密を欠くが、経済成長における摩擦の要因という観点を考慮に入れるとき著者の提案した box の内容を一層豊かにする1つの方向が生まれるのではないであろうか。

第5章の人口圧力、この論文の後半に取められた都市問題に関するすぐれた研究は、ホゼリッツがもつ一種のアンバランスト・グロウスのヴィジョンをしのぶに足り、上述した摩擦要因の手がかりを与えるものではないかと思われる。

(調査研究部所員 小出厚之助)